

ホルツィウスとヘインの『ルドルフ二世の将校と軍人』

司書三課課長 佐藤 俊子

本書はオランダの画家で版画家のヘンドリック・ホルツィウス(Hendrik Goltzius ミュールブレヒト生1558-ハールレム没1617)とフランドルの画家、版画家ヤーコブ・デ・ヘイン(二世)(Jacob de Gheyn II アントウエルペン生1565-ハーグ没1629)のふたりによる12枚の銅版画集として、1587年にアムステルダムで刊行された。

本書は、Officers & soldiers of Rudolph II (K 383.135-G)となっているが、ヒラー、リツパーハイデ、コラの書誌による書名は(Officers and soldiers of a regiment of infantry of the Netherlands) (『オランダ歩兵連隊の将校達』)と記されている。

ホルツィウスは16世紀のネーデルランド・マニエリスムから17世紀のオランダ・リアリズムへの過渡期に活躍した最も重要な芸術家の一人で、神話、聖書、歴史、寓意、風俗などあらゆる分野に主題を求め、図像学の面でも識者であった。

1577年からハールレムで銅版画家として活躍していたが、1590-91年のイタリア旅行では古代ローマ彫刻やイタリアの巨匠たちの作品を研究し、ハールレムに戻ってからは、それらの作品やデューラー、ルーカス・ファン・レイデン、ピーテル・ブリュゲル(一世)などの手法から影響を受けながら数多くの版画を制作した。

ヤーコブ・デ・ヘイン(二世)は同名の父ヤーコブ(一世)についてホルツィウスに学び、自然科学の造詣も深く、素描家としてもレンブラントの先駆者とみなされている。

表題のルドルフ二世(1552-1612)は神聖ローマ皇帝(在位1576-1612)で、政治家としては、暗君であったといわれるが、皇帝のプラハの宮廷は当時の宮廷文化の頂点をなしていた。ルドルフ二世自身がマニエリスム的人物であり、この皇帝のもとには、多くの芸術家が集まった。

本書のどの図版にも、軍隊の点景に描かれた人

物の姿とラテン語の二行詩節のキャプションが記されている。

ホルツィウスは1582年に版画による軍人シリーズをはじめ、戦闘に有利な高所には将校を大きな全身の姿で表現し、下部の背景には、遠くの訓練場や広大な軍事的野営地で武装した兵士たちを描いている。版画の様式は、フランドルの画家、バルトロメウス・スプランヘル(Bartholomaeus Spranger 1546-1611)の影響を受け、例えば、「旗手」(図1)などに見られる複雑なコントラポスト(contrapposto)は後期ルネサンスの絵画・彫刻で体のねじれやひねりを強調した人体の表現法である。また線刻銅版画、ビュランによる技法は作品を高め、軍旗を見ると、網状線の陰影などつけずに線が全て平行に彫られていることが判る。



図1 「旗手」

本書は、①中世の傭兵隊長②国王の軍隊副指揮官③鼓手④旗手⑤剣と円盾を持った兵士⑥マスケット銃（火縄銃の一種）で武装した見張りの歩兵⑦火縄銃を装備した兵士⑧上級下士官⑨槍兵⑩主計将校⑪中世の鉄兜を被り、マスケット銃で武装した歩兵⑫軍隊の法務官を銅版画で表している。なかでも、「上級下士官」（図2）の図版は、『リッパーハイデ服飾文献目録vol.2のp.151にも掲載されている。

当時の服装については、ラシネの服飾史(Racinet, Albert Charles August: Le costume historique. 1888) (383.1-R-1~6) の第4巻「フランスとフランドル 16世紀 アンリ3世治世下の歩兵の服装」の章に解説されている。また、この原本を元に、翻訳、再構成、編集、再装幀された英語版 The historical encyclopedia of costume (383.1-R) が1988年にロンドンから、その仏語版 Histoire du costume (383.1-R) が1996年にパリから出版され、日本語版『世界服飾文化史図鑑』(383.1-R) も1991年に刊行された。この他に、原本の中世ヨーロッパの



図2 「上級下士官」

服装を中心に抜粋した『服装史 中世編 I』(383.1-R) もある。それぞれに掲載された図版は原本からのものであるが、原本の解説の章の最後に「衣装は H. Goltzius からの模写である」と、明記されている。原本に模写されている図版の9点のうち、6点が本書からのものである。ラシネの服飾史の解説によれば、16世紀のフランスとフランドルの歩兵隊の制服には十分に類似性が見られ、フランスにも当てはまるものであるとして、これらの図版が服飾史に掲載された、と記されている。

当時の鉄製の武具は、槍兵の上半身に見ることができが、マスケット銃がそれまでの銃の口径よりはるかに大きかったにもかかわらず、銃兵は鉄兜を被る以外、防御のための防具は何も身に付けていなかった。兵士達はパンスロン(panserion)として知られた腹部を膨らませた上着に趣向を凝らしていた。つまり、このような太鼓腹は、胴着の下に大量の綿を使った詰め物を入れて、滑稽なほど前にせり出した胸甲によるものだった。この様子はピースコッド・ベリード(peascod-bellied)ともいわれた。これは、鉄製の槍や胴鎧を放棄し、軽い兜と円形の盾を装備するようになったためと推察される。ダブルット(doublet)は袖やスラッシュ(slash)のあるもの、ないものがあるが、いずれもパンスロンの上に合うように調節されていた。ズボン丁度は、膝下までの丈で、ぴったりしたり、膨らんだりしていた。もはや、この頃は、コッドピース(codpiece)を付けていなかった。ラフ(ruff)はダブルットからはみ出して立ち上がっていた。被り物はトーク(toque)または、50cm以上の羽根飾りなどが付いたつばの広いスペイン・スタイルのソンプレロ(sombrero)が用いられた。サッシュ(sash 飾り帯)は個人の標章であり、軍旗は連隊の標識だった。軍旗は絹製で、非常に大きかったため、地面を引きずらないように、肩に担いで、立てていなければならなかった。太鼓も大きなもので、行進の時は脇に持った。軍事用の外套はそれほどゆったりしたものではなく、めったに膝下より長いものはなかった。